知覚動詞構文と there 構文

葛西 清蔵

筆者は葛西（2004）において、Ving の性質を論じ、Ving は V のあらわす動作、状態の一こまを表わす、と結論した。本稿では、Ving を含む知覚動詞構文と、there 構文のもつさまざまな面について検討し、両者の関係をさぐる。つきのような章ところで議論をすすめる。

1. 知覚動詞と Ving
2. there 構文
   2.1 性質：その 1
   2.2 性質：その 2
   2.3 性質：その 3
   2.4 性質：その 4
3. Ving と知覚構文・there 構文の関係

1. 知覚動詞と Ving

まずつぎの例を見よう。（この章の議論は葛西（2004）を参照）

1.a I saw John cross the road.
   b I saw John crossing the road.

（1a）では John が道路を横切るのを、始めから終わりまで「できごと全体」（complete event）を見たのだといい、（1b）では、John が横切る途中を見たの
だという。（Swan 1985：284）。これに関連してつぎの例は説明できる。

2.a  *He caught the thief steal the money.
    b  He caught the thief stealing the money.

the thief を捕らえる場合、その動作の一瞬を捕らえるはずであり、動作の一部始終を捕らえるということはありません。したがって、steal の途中の一こまを表わすstealing がこの場合相応しい。つぎの例はこれを確認してくれる。

3.a  *In this photograph you can see Jean blink.
    b  In this photograph you can see Jean blinking.

「写真」のような、動きのない「凍りついた動作」（frozen action）を写し取ったものには、「始めから終わりまで」という長さをもつ blink は不適切で、「一瞬」をきりとって表わすblinking が相応しいのである。

2. there 構文

この章では there 構文の性質を見ることにする。

2.1 性質：その 1

この構文について、まずあげられるのは、there be のあとには、「定的なる」（definite）なものが出にくいということであろう。

4.a  *There is the car of John in the street.
    b  *There is John's car in the street.
    c  There is a car in the street.(1)
知覚動詞構文と there 基文（葛西清蔵）

このことから、この構文は「新」情報を提示する文であるといわれる。
注意すべきことは、「定的な」ものが来にくいということは「定冠詞」のついたものが来ないということを意味するものではない、ということである。

5.a In England, there was never the problem that was in America.
   b There's the strangest bird in the cage.
   c There was never the same problem in America.

(5a)のように関係代名詞のついたもの、そのほか、(5b)のように最上級であっても「新情報」として提示されているかぎり問題はない。（荒木 1986：778-9）。このことは、許容度は幾分落ちるが、つぎのような「列挙」の例にも当てはまるであろう。

6.A: What is there to go to around here?
   B: ?Well, there isn't the Washington Monument anymore ...that was swept away in the flood. （荒木 1986：783）

ここでは、Washington Monumentにtheがあり、「あの」Washington Monumentのはずであり、「既知」（known）のものが「新」情報として提示されているのがわかる。

2.2 性質：その2

2.1では、there基文は、全体として新情報を提示する文であることを見た。
このため、この構文全体が、いわば「主張」部分となっていることを示したい。

7.a What is there t in the refrigerator?
   b Where is there some salami t ?
   c Which drawer is there a spoon in t ?
一般に「抜き出し」が可能なのは主張部分であるから、(7a、b、c)のような文が可能であるということは、まさしくthere構文全体が「主張」になっていることを示していることになる。また、つぎの例にみられるような現象を示すことも、このことを支持することになるろう。

8.a  ??That there stands on his dresser a Tiffany lamp is surprising.
     b  That a Tiffany lamp stands on his dresser is surprising.

9.a  ??It is possible that while they were eating there ran out of woods a grizzly bear.
     b  ??It is likely that while they were eating there ran out of woods a grizzly bear.

10.a  *There is occurring a riot. (荒木 1986：781)
      b  *Bill is always arguing well.
      b' Bill always argues well.

(8a)では、there構文が主語になっている。主語はもともと話し手、聞き手に了解されていると思われる、旧情報が来るべき位置であるから、全体として主張で、新情報であるthere構文が現われるのは適当ではない。(9a、b)では、there構文がit is possible/it is likelyの中にある。これらはいずれも、後来る文の内容に対する弱い蓋然性を示す表現である。There構文（しかも文尾）で、はっきりとした主張をしておきながら、一方で、その主張に対して「かも知れない」という弱い蓋然性を示す表現を付け足す、というのは、話し手の態度に一貫性がないことになり、結果としてこの文は非文となる。また、(10a)では、進行形が非文の原因となっている。もともとこの文の焦点はa riotであるが、「事態の変化に注目」する進行形は、意味的に優位になる。(葛西 2004：57)。このためa riotと「進行形」は衝突し、全体として非文となる。このこと
知覚動詞構文とthere構文（葛西靖蔵）

は、(10b, b')の比較でも明白である。この原因は「議論がうまくい」という文尾がこの文の焦点であるはずだが、argueを進行形にすることによって、この部分が新たに意味的に優位になり、この部分が焦点であるはずのwellと「衝突」していることが非文の原因であることはまちがいない。

2.3 性質：その3

またthere構文は、つぎにみるように顕著な特徴がある。

11.a  *There were several students tall.

   b  There were several students ill.

   (Quirk et al. 1985：1405、荒木 1996：387)

   c  *There was a Canadian a good doctor. （安井 1996：813）

（11a, b）に見るように、studentsのあとに許される形容詞は、tallのような半永久的な性質(permanent property) (Quirk et al. 1985：1405)を表わすものではなく、illのような一時的状態(temporary state as opposed to a (relatively) permanent property) (Huddleston and Pullum 2002：1394)を表わすものでなくてはならない。（なお、「名詞句は後続不可能」（安井 1996：813）として(11c)のような例があげられるとするが、このa good doctorも一時的なものでないことは明白である。）このことは重要である。Several students tall/illという語順は、たしかに「ネクサス」をなしており、これがwereによって、過去のこととして示されている。ネクサスはJespersen (1937：95)によれば、「a drama or a process'のようなものであり、時間とともに変化して行くものである。いま、tallとillを比較すると、時間の経過とともに、刻々と変化していくのはtallよりはillであろう。ここから分かることは、

there構文が「存在文」だというのは、ある「もの」が存在する、ということを示しているというより、その「もの」を含む、ある「こと」('事柄\n
27
事態）が存在する、
と考える方がよいのではないか、ということを示唆しているようである。

2.4 性質：その4
「存在」文において存在するのは、「もの」でなくて「こと」（事柄、事態）であることを、ここでさらに確認したい。たとえば、

12. There are some pages missing in the book.

において、There are some pages となっているが、missing しているのであるから、some pages が「存在」するわけではない。「存在」するのは、あくまで ‘some pages missing in the book’ （「この本に数頁かけている」という「こと」である。（cf. 安井 1996：813）。「こと」が存在するのであれば動詞は is と単数になるはずである、ということについては、動詞を近い some pages に一致させた、と考えるのが一般的であろう。）
「こと」を「もの」で表現するということは英語の特徴であることは、つきの例と説明でも理解できよう。

13.a No news is good news.
   b S(PS2) VP(21) (Jespersen 1971：52)
   c receiving no news’ (Quirk et al. 1985：792)
   d ‘there no being any news’ (村田 2005：175)

（13a）の no news の箇所を、（13b）では PS としている。つまり、「述語＋主語」とみている。これは no news を「news がないこと」としていることを示している。（13c）では、やはり、「news をうけないこと」としているし、（13d）では、「news がないこと」としている。確かに、英語は「こと」を「もの」的に表現
知覚動詞構文と there 構文（葛西清蔵）

する傾向があるようである。(2)

いま見た「こと」、「もの」の関係はつぎの中島（1961：193-4）にもはっきりうかがい知ることができる。

14.a  There is a bird singing.
   b  There is Father waiting for you.
   c  There was a huge tower overlooking the market-place.
   d  *A huge tower was overlooking the market-place.

これらの文について、中島は、(14a) では、「鳥のなくあり」であり、(14b) では「父の汝を待つあり」だという。(14a, b) ともに、a bird, Father という「もの」が存在するというのではなく、「鳥がないている」、「父がまっている」という「事」（事態：event）が存在するのである。(14c) において可能な a huge tower overlooking the market-place は、(14c') の進行形の形では不可能である。overlook の一こまを示すネクサスとしてならば許容されるのである。存在するのは「ネクサス」で、すでに見たように時間ともに変化してゆく drama であり、process である。

上の 2.1—2.4 では、there 構文のもつ性質をいくつかの点から見てきた。このことに関わりのある例をここで見ることにしよう。

15.a  *He caught the thief steal the money (=2a)
   b  He caught the thief stealing the money. (=2b)

16.a  ?*There were several students tall. (=11a)
   b  There were several students ill. (=11b)

(15a, b) で許容されるか、されないかの区別は、steal が、最初から最後まで、
という時間的な長さがあるのに、stealing では、その動作の一瞬であるという、
といううちがいがきめてであった。一方、(16a, b) では、許容されるか、されな
いかの区別は tall の半永続的な性質と、ill の一時的な性質のちがいであった。
許容されない (15a)、(16a) では、いずれも時間的なながさのあるものであり、
許容される (15b)、(16b) ではいずれも時間的なながさのない、ないしはみじか
いものである。steal と stealing の関係は、there 構文の tall と ill の関係に相当
するといえる。

さきに (14a, b) (17a, b としてくり返す) で見た文の singing、waiting はたし
かに一時的なものである。

17.a There is a bird singing. (=14a)
   b There is Father waiting for you in the car. (=14b)

このことから、われわれが検討の対象にしている 2 種類の構文には、共通に
「時間的な短さ」がかかわっているのは間違いないようである。以上の検討をふ
まれて、知覚動詞の構文と there 構文の類似点を見つけたい。

まず、さきに見た中島 (1961) にふれたい。中島によれば、存在文は、つま
るところ「ある「こと」がある」ということをいう文であるという。彼によると
と、文とは、主動と述部からなるが、結局、主語になる部分を認定すること（一
次判断）、それについて何かを述べる部分（二次判断）から成るのが文だという。
ところが there 構文だけは、ある事柄が存在することだけをのべる「単純判断」
の文だという。⑴ つまり、there 構文は、ある事態、事柄をそのまま、こういう
事態があるとして提示する文だとする。目の前にある事態、事柄をそのまま提
示するものだというのである。

このことは there 構文のもつさらに大きな特徴と関係があると思われる。つ
ぎの例を見よう。
知覚動詞構文とthere構文（葛西清蔵）

18.a *There are all the books on the table.
b *There was everyone in the room.
c *There were most students in the room.

19.a There were many students in the room.
b There were some salesmen sick in the bed.
c There were several books on the table.

（18a、b、c）の文から、「普遍性の高い数量詞は許されない」（荒木 1996：779）とする。「不定性 (indefiniteness) の要求」（安藤 2006：487）ともいう。しかし、その理由はどこにも示されていないが、つぎのようにいいうことはできる。突然、本がある場面を見せられた場合、その本が、all であるとか、every であるとかわかるはずはない。そこにある本が、all であるか、every であるかは、その場のないものとの関係で言及していえることである。許容される数量詞 some、many などは、そこにあるものを一見すればわかるが、all、every は一見しただけではわからない。some、several などは、一瞬の状況をのべ伝える there 構文に相応しい。

3. Ving と知覚構文・there 構文の関係

there 構文のもう一つの面を見てみよう。There 構文では、be 動詞のほかに occur、appear などの動詞も現われうるが、それらの意味は、およそ「なんらかの物体が話者の視界に存在するようになる」（荒木 1986：781）といわれている。（4）しかし、いま、風で木々がなぎ倒されている場面があるとする。それを
There was a strong wind blowing down many trees. としたとしても、被つ
に風そのものがみえるわけではないから、上の荒木は言いすぎであろう。また、
その部屋で学生が読書をしているとする。この「こと」を新情報として提示す
るには、There is a student reading a book in the room. となるであろうが、
CULTURE AND LANGUAGE, No. 67

ここでは a student という「もの」が話者の視界に「存在」することはありません。今、「存在」する「もの」である student を see という知覚動詞を使い (20b) のように表現することは可能であろう。

20.a There is a student reading a book in the room.
   b I see a student reading a book in the room.
   c I see that a student is reading a book in the room.

(20b) では、see と read は同時であり、しかも自分の目で見ているのであるから、直接知覚である。(20c) では、see の目的語になっているのは that 節であり「こと」である。この時 see は「わかる」の意味であり、間接的・認識的知覚となる。(20b)、(20c) の関係はつぎの例でいっそうはっきりするであろう。

21.a I could smell that the milk wasn't fresh.
   b そのミルクが新鮮でないのがおいでわかった。

     (小西 1985:1453)

   c I smelt the milk.

(21a) は that 節をとる間接的・認識的知覚であるが、これに対して (21b) のような訳を与えている。これは (21c) のような直接知覚にもとづかなくてはできない。こう見ると、つぎのように言えることになるであろう。

間接的・認識的知覚の文のもとには、直接知覚の文があり、直接知覚の文のもとには、there be の「存在」文がある。

「存在」する（「もの」をふくめた）「こと」があって、はじめて直接に知覚ができ、間接的認識ができるのである。この関係はつぎの例でも確認できるであろう。

32
知覚動詞構文とthere構文（葛西澄蔵）

22.a I found [her gone].
   b There are [some pages missing in the book]. (= 5)

(22a) で、found の目的語は、her gone であって、her ではない。去ってしまった人が found の対象であるはずがない。また、(22b) で「存在」するの は「数頁欠けている」であって、数頁ではない。いずれも「認識」の対象である「こと」の中から「もの」(her, some pages) を抜き出している。

注

(1) (4a, b)の非文と、許容される(4c)を較べてみると、定冠詞・固有名詞と不定冠詞の違いであ る可能性がある。と予想をたてることができる。ここに見られる意味の「優位性」は、たとえば、「指定主語条件」(specified subject condition) などの統語現象にもふくく関わるものである。
(2) 存在するのは、「もの」ではなくて、まず「こと」である。ということについて、つぎの例は参考になる。
   i.a I have seen faith accomplish miracles.
   b *I have seen faith.

これについて、Kirsner and Thompson (1983) はつぎのようにいっている。「it is not the complement subject but rather the entire complement which must be considered the object of the sensory verb.’

(3) この意味で there 構文は特異なものであるとして、中島・毛利 (1959) は、従来の 5 文型のほかに、第 6 文型として「単純判断」の文型をもうけ。毛利 (1972) は there VS という文型を設定した。
(4) 「存在」しないものを知覚するということはあり得ないわけで、この意味では問題がないであろう。しかし、「存在することをやめるという意味の動詞は生じることはできない」(荒木 1986: 781) と言い切ることはできない。disappear でも、徐々に消える場合には、消える途中にあるものを知覚すること
は十分にありうるからである。Bolinger (1979) にはつぎのような例がある。Kayne（1979）の(ic)の例も参照。
    i.a. There were just going out several important messages. (1979: 97)
    b. In the vortex there disappeared (went down) ship after ship. (1979: 100)
    c. There has just appeared/??disappeared another book by Smith. (1979: 714)

(ib), (ic) では ship after ship, another book とあることも注目しよう。disappear する時間に関係あるかも知れない。

参考文献

安藤貞雄 2005 『現代英文法講義』開拓社
荒木一雄(編) 1986 『英語正誤辞典』研究社
荒木一雄(編) 1996 『現代英語語尾辞典』研究社
Bolinger, D. 1979 Meaning and Form Longman
Jespersen, O. 1937 Essentials of English Grammar George Allen and Unwin LTD.
Jespersen, O. 1971 Analytic Syntax 千城出版
葛西清蔵 2003 『英語学演義』現代工学社
葛西清蔵 2004 「(be) Ving の意味と特質」『英語学点検』共同文化社
Kayne, R.S. 1979 ‘Rightward NP movement in English and French’ LI. 10-4: 710-719
Kirsner, R.S. and S.A. Thompson 1983 ‘The role of inference on semantics: a study of Inference on semantics: a study of sensory verb complements
知覚動詞構文とthere構文（葛西清蔵）

in English' *Glossa* 10; 200-240
小西友七（編） 1985 『英語基本動詞辞典』研究社出版
毛利可信 1972 『意味からみた英文法』大修館
村田勇三郎 2005 『現代英語の語彙的・構文的事象』開拓社
中島文雄 1961 『英文法の体系』研究社
中島文雄・毛利可信 1959 『高等英文法』山口書房
Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and J. Svartvik 1985 A Comprehensive Grammar of The Contemporary English Longman
安井 穂（編） 1996 『コンサイス英文法辞典』三省堂